

“違う”のは、いけないことですか？

2m近い体格と黒い肌、そして巨大なアフロヘア。ひと目でその人と分かる副島淳さんは、その容姿ゆえにいじめを受けていたことがあります。ですが、現在はその見た目を武器の一つにして芸能界で活躍中。

いじめをどのように乗り越えたのか？ さまざまなルーツを持つ人とどう関わるべきなのか？ 蒲田にゆかりのある副島さんに話を聞きました。

肌の色を「汚れた」と言われた

生まれたのは大田区蒲田です。当時は母と、母方の祖母と3人暮らし。母は働きに出ていたため、基本的に祖母と生活していました。保育園は楽しかったし、地域の人にもかわいがってもらったし、自分の容姿や境遇が気になることはまったくありませんでした。

その後、葛飾区そして都外に転校したのですが、2度目の転校先でいじめにあったことがきっかけで、肌の色、髪質、父親がいない家庭環境が気になりだしました。

殴る・蹴るといった身体的暴力もありましたが、いちばんきつかったのは言葉の暴力です。肌の色をなじられたり、分厚い唇を笑われたり……。ある時は「肌の色は落ちるだろ」と言われてデッキブラシで延々とこすられました。「これは汚れた」と。周りのみんなとは“違う”ことを初めて意識させられました。

いじめに対して、最初は抵抗していました。手を振りほどいたり「やめてよ!」と拒否したり。だけど子どものいじめって、反応すればするほど相手が喜んじゃう。どんどんエスカレートする。

そういう空気が分かってきて、小学5年生以降は抵抗をやめました。リアクションがないから「つまらないや」と思ったのか、いじめは少しずつ収まりました。いてもいなくてもどちらでもいい、空気のような存在になりましたね。卒業するまで誰とも関わることはなかったです。

逃げたら未来が明るくなった

転機になったのは、中学校でバスケットボール部に入ったこと。本当はサッカー部がよかったのですが、いじめっ子がたくさんいたので諦めました。

そこで、逃げるように決めたのがバスケ部でした。部員は別の小学校出身の子がほとんどで、先輩たちも優しくかった。練習も厳しくなかったし(笑)。バスケは未経験で、やりたかったわけではありませんでしたが、いじめからの逃げ場にしたかった。

2面へ続く



タレント
副島

淳さん

副島淳さんのプロフィールは4面をご覧ください。